

一特集一 閲覧室の現状と問題点（その2）

教養部図書室

教養部図書室は主として学生の自習のために奉仕しているが、学生数（1・2回生）5,073名に対して第1・第2閲覧室の座席数は184席でありその比率は3.6%である。これは標準の10~20%にくらべるとほど遠い。そのうえ、第1・第2閲覧室の両面積361m²の中に収納、目録などのスペースも含まれているので、館外貸出の奉仕に重点をおかざるを得ない。現在、教養部での館外貸出は登録制により「帯出券」を発行しているが、その交付率は好ましいとは思えない。現状は、1回生2,056名に対し752名（昭和46年11月15日現在）、および2回生2,567名に対し972名であり半数にも達していない。これは、1冊1週間という貸出条件の不利なことも問題であるが、教養部の学生が附属図書館の利用者数の半数を占めていることからみて、まず座席数の絶対的な不足、また開架図書（安全開架式）も第1閲覧室2,700冊、第2閲覧室800冊が限度というスペースが少ないこと、そのほか雑誌・新聞の閲覧や参考図書、カード目録も同居しており、必要な図書のほとんどが出納式となっていることなど、利用に不便であることが大きな原因となっていると思われる。それでも、閲覧室は授業時間の合間や雨天の場合は特に集中し、入館者は閲覧座席の確保に必死である。

このような条件のもとで、数年前からリングフォンなどの語学テープの貸出を実施したり、「学内相互利用書」による学部学生の利用も増えるなど、奉仕面でカバーするよう努力している。しかし、閲覧面積の絶対的な不足だけでなく、三高時代から引継いでいる現在の教養部図書室は、施設面からみても早急に根本的な改善が強く望まれている。

教育学部図書室

教育学部図書室は蔵書冊数48,198冊、年間受入冊数約3,000冊、雑誌471種、閲覧座席数26席、年間利用者数7,944名という現状である。一部、特殊図書を除き蔵書のほとんどは自由に書庫内でみることができ自由開架式のため、年間延19,346冊の館外貸出として利用されている。全蔵書冊数に対する利用冊数の比は約40%に達し、半数近くの蔵書が利用されていることになり、利用の効率は高いと考えられる。

学部の性格上、ほとんど全分野にわたる内容の図書を所蔵しているが、教育学・心理学および社会学関係の図書が蔵書の大半を占めているために、近来、教育問題が大きくクローズアップされ、また、教員資格取得のための教育実習のため参考図書の多くを所蔵している関係上、教育学部在籍の利用者に限らず、「学内相互利用書」による利用者が急増し、その利用者数は学部関係者数の $\frac{1}{2}$ にもおよんでいる。利用冊数は、10年前と比較して約3倍に増加している。

このような利用の急激な増加、多様化に伴って様々な問題がある。問題の1は、閲覧担当職員が1名であるため利用者要求の多様化、量的な増加に対処する閲覧・参考事務の複雑化に充分に応えられないことである。問題の2は、このような利用者要求の多様化に応えうる図書および資料が不十分なことである。資料購入予算とも関係するが、一次資料を極力調査して収集するよう努力し、教育課程文庫目録・図書館学関係・雑誌目録などの冊子目録を作製して、カード目録を冊子にして利用に便利ないようにしている。問題の3として、閲覧室の座席数および閲覧室面積が26席、74m²と少なく、また、書庫は小さな部屋に仕切られておりともすれば迷路の感を与えないでもない。

そのほか、どこの図書館にも共通の問題として書庫スペースが増加する図書に追いつかないのであるが、教育学部でも同じ悩みをかかえている。その解決に努力しているが、利用者にますます不便をかけることを恐れている。（統計数は昭和46年12月末現在）